

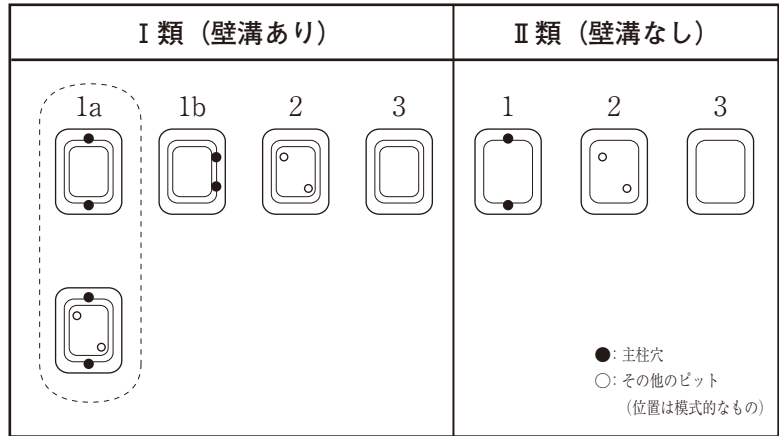
少ない。

この時期の焼失住居としてSI3・6が確認されている。出土した炭化材を樹種同定した結果、スダジイの多用が認められた。

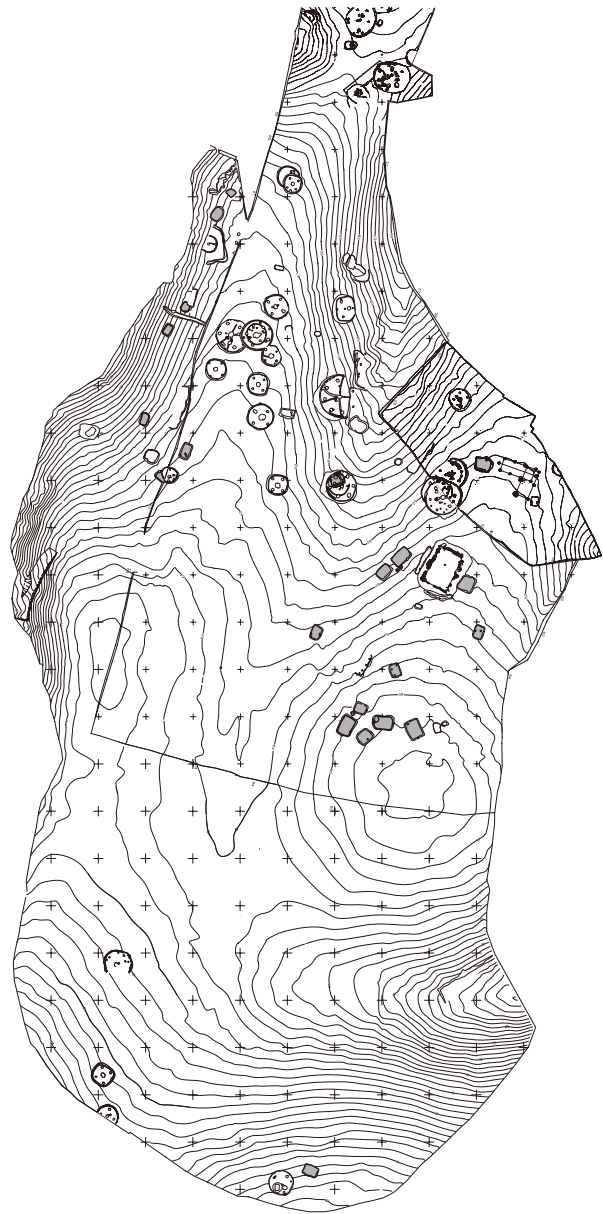
弥生時代中期後葉(Ⅳ-2~3)

2区南端から4区北端にあたる鞍部を境にして、北側に位置するⅣ-1段階の集落域と重複しない。竪穴住居跡17棟、段状遺構9基、掘立柱建物跡4棟^(註3)、貯蔵穴1基、方形土坑23基、その他土坑23基、溝2条が確認されている(第155図)。主要な遺構分布域は3区から6区にかけての東西両尾根であるが、墳丘墓を境にして西尾根を中心に竪穴住居跡が配置され、墳丘墓南側にはⅠ類の方形土坑^(註4)が密集している。また3区で検出された独立棟持柱を伴う掘立柱建物跡は遺物を伴わないため確証はないが、この時期のものだとすると墳丘墓の北に設けられたことになる。竪穴住居跡の規模は、推定53.7㎡と超大型のSI37が認められること、中型としたSI35も限りなく大型に近く、大型以上と小型に分かれることが指摘できる。配置は大型(SI26、31、38、54)及び中型のSI35は超大型のSI37を囲むように存在し、その周縁に小型が配置されている。西尾根を中心とした居住域と、墳丘墓や独立棟持柱を有する掘立柱建物跡、方形土坑Ⅰ類が認められる東尾根が機能的に区別されていた可能性があり、Ⅳ-1からⅣ-2~3にかけては、構造変化を伴う集落の移動がなされたものと思われる。

この時期の特徴のひとつとして、方形土坑の増加が挙げられる。今年度調査を行った6区では7基見つかったほか、墳丘墓の調査過程で4区にも1基追加となった。この時期の方形土坑の分布を第157図に示した。一見し



第156図 方形土坑分類模式図



第157図 方形土坑分布図

て分かるのは、墳丘墓南側に大型の5基がまとまっていることである。これらはすべて支柱穴を持つI-1類(第156図)であり、I-1類の方形土坑はここ以外には認められない。位置的にも竪穴住居との関わりが認められないところであるため、これらI-1類の方形土坑は墳丘墓を意識した配置と考えられる。また墳丘墓の東に軸を同じくして接するSK116も墳丘墓との関わりが考えられるし、墳丘墓の西に近接するSK123も支柱穴は持たないもののI-1類と同規模であり、他の方形土坑とは区別されるものかもしれない。その他底面積3~5㎡の小型の一群は、6区の調査で居住域である西尾根に並ぶように検出された状況が新たに確認され、集落の縁辺部に設けられたものである可能性が出てきた。昨年度の調査を終えた段階では、IV-2~3段階の方形土坑が主たる居住域ではない東尾根に集中することを重視して、この時期には方形土坑が集落全体の管理化におかれたと考えたが、小型の一群に関しては検討を要する。梅田萱峯遺跡は遺構全体に占める方形土坑の割合が高いのが特徴であるが、それだけに位置づけも難しく、類例の増加を待ちたい。

6区の南端ではこの時期の竪穴住居跡2棟と方形土坑1基のほか、壺や器台等を大量に廃棄した土坑(SK166)1基が新たに発見された。SK166は何らかの祭祀行為に用いた土器を集中的に廃棄した可能性があり、こうした状況は昨年度までは認められなかった。残念ながら調査区境と接し、どのような遺構の広がり示すのか明らかではない。同じ時期の遺構で距離的に最も近いのは、4区東尾根南側に集中している方形土坑I-1類群であり、ここから約80m離れている。その間に谷を挟むとはいえ、これだけの遺構空白地が介在することから考えると、別集落である可能性もある。

弥生時代後期前葉

西尾根で5棟の竪穴住居が見つかったほか、6区南端付近で新たにSI43が検出された(第158図)。またSI43の南東約40mに位置するSK166上層にもこの時期の土器が含まれており、6区南端部付近にこの時期の集落が展開していた可能性もある。また西尾根のM28グリッドでは古墳時代中期のSI16の周堤埋土中に、この時期の土器が含まれていた。当該期の住居からはガラス小玉が出土することが多く、その大部分は床面からのものである。SI18からはガラス勾玉も1点見つかったが、これは埋土上層からの出土であった。

弥生時代後期中葉

これまで確認されていた西尾根上のSI20に加え、そこから約100m南でSI49が新たに確認された(第158図)。また4区から6区にかけて、土器が散発的に出土している。

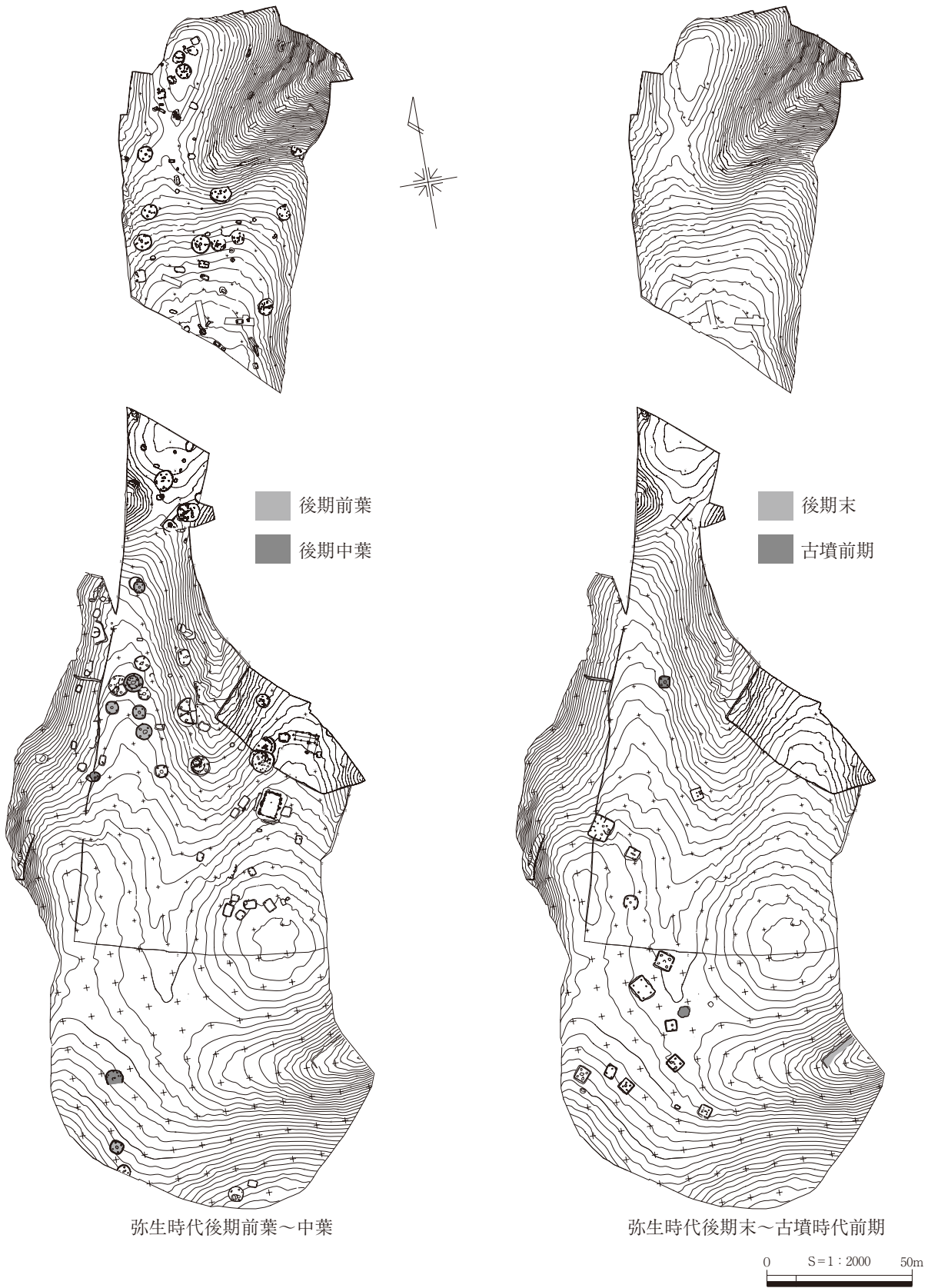
SI20は焼失住居である。出土した炭化材の樹種同定の結果、シイノキ属、アカガシ亜属が用いられているとの結果が得られた。

弥生時代後期後葉

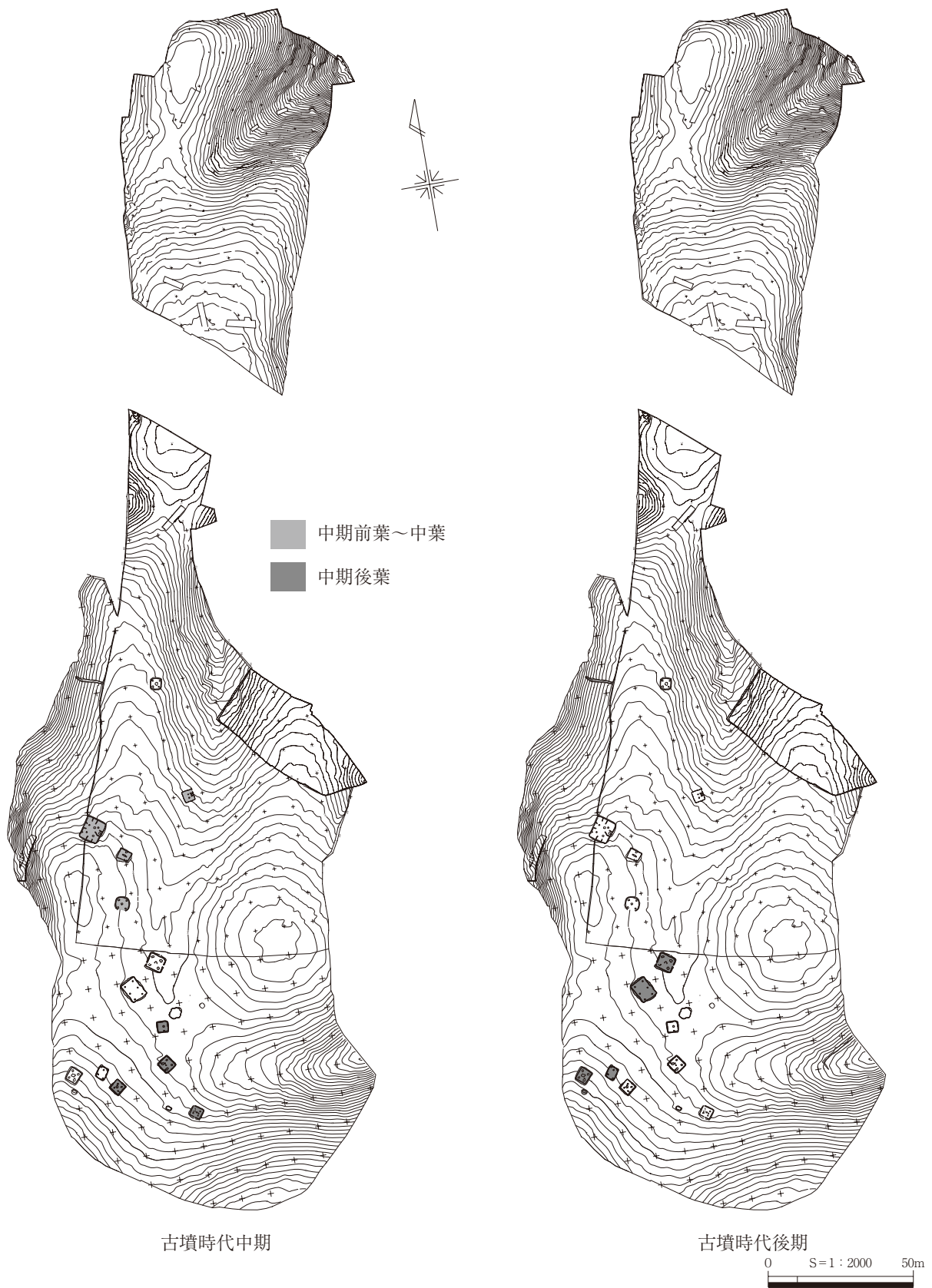
この時期の遺構は認められず、6区谷部に存在するSS14埋土中及びその周辺からややまとまって土器が出土している。

弥生時代後期末

SS14がこの時期に該当するほかは、目立った土器の出土はない(第158図)。



第158図 梅田萱峯遺跡変遷図(2)



第159図 梅田萱峯遺跡変遷図(3)

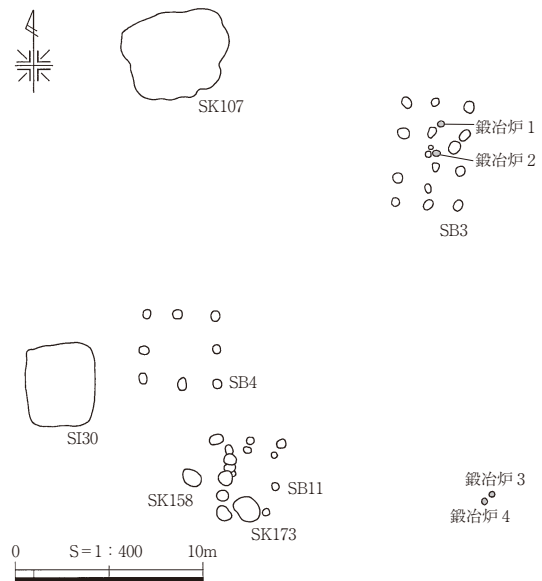


第160図 梅田萱峯遺跡変遷図(4)

弥生時代後期中葉(V-2)から後期末(VI)にかけて、梅田萱峯遺跡では集落としての様相が不明確となる。ただこの時期の遺構・遺物が少ないながらも6区南側で検出されていることが注意される。それは弥生時代中期後葉(IV-2~3)でも見られたことだが、6区南側の調査区外に別の集落が存在する可能性を示唆している。その点で注目されるのは、本遺跡の南西約500mに位置する八重第3遺跡である。ここは圃場整備に伴い、昭和61年度に中山町教育委員会(当時)が発掘調査を行っている(富長・江原1987)。図示された土器を見る限り、時期不明のものを除いて弥生時代後期中葉から古墳時代前期に至る竪穴住居が11棟検出されており、梅田萱峯遺跡で明らかにできない時期の空白を埋めるかのようなものである。両者は距離的にやや離れており、直接的な関係を捉えることはできないが、弥生時代中期後葉のなかでもIV-1からIV-2~3にかけて集落が移動したように、弥生時代後期以降も集落域が移動した可能性を示しているといえよう。

古墳時代前期中葉

4区西尾根北側にSI24が築かれている。また6区で検出されたSK177の埋土中からこの時期の土器が出土しており、単発的に土坑が認められる(第



第161図 鍛冶関連遺構配置図

158図)。

古墳時代中期前葉～中葉

古墳時代中期前葉は4区西尾根にSI39が認められるのみである。次の中期中葉では床面積約54㎡と大型で周堤の痕跡も確認できたSI16と、その周囲にSI34・19が築かれる(第159図)。

古墳時代中期後葉

6区東に向かい延びる谷の谷頭付近にSI45・46・47・48が認められる。これらは一定間隔をあけて築かれており、出土遺物からも同時に存在した可能性が高い。これらは前段階に築かれた住居のうちで最も近いSI34からは南に約60m離れており、居住域そのものを南へ移動したようである(第159図)。

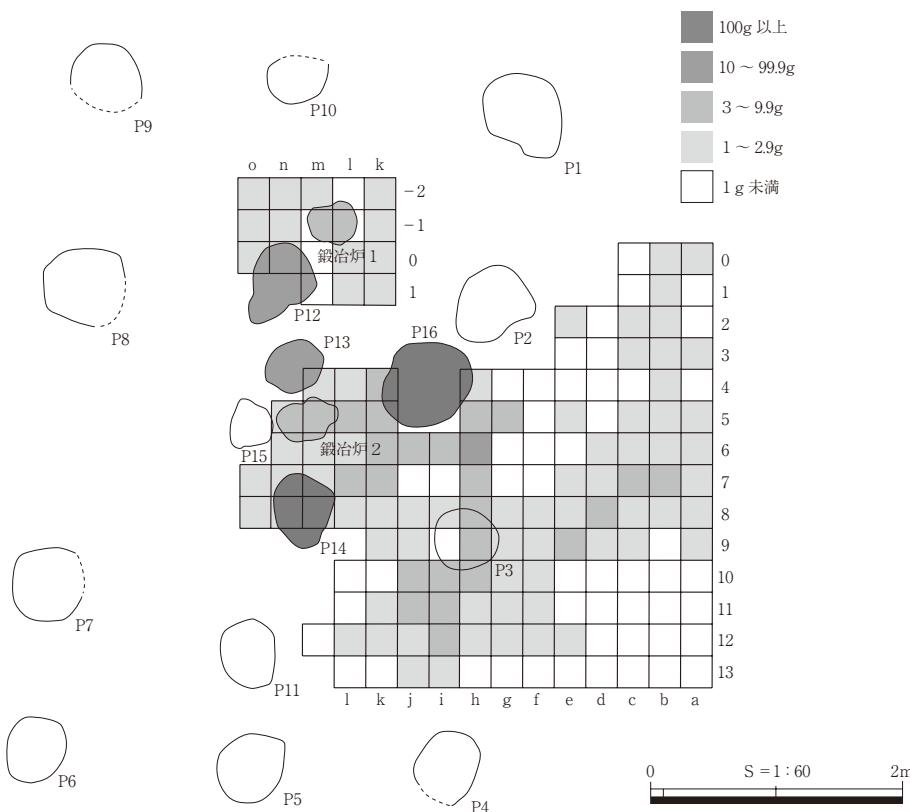
SI45は焼失住居で、炭化材の樹種はアカガシ亜属、スダジイ、クヌギ節であるとの結果を得ている。

古墳時代後期

前段階の遺構分布域からわずかに北西に移動した空間が、この時期の遺構分布域である。SI41・44・50・51の竪穴住居跡4棟が確認されている。出土土器からするとSI41がやや古相を示し、それ以外の竪穴住居が後期中葉と思われる(第159図)。

1区谷部ではこの時期の土師器甕を埋設したP133が検出されている。周辺に同時期の遺構はなく、単発的に築かれたものである。また2区で検出された製炭土坑SK61は時期を決定できる遺物を伴っ

ていないが、炭化材の放射性炭素年代測定結果が6世紀後半から7世紀代を示している。

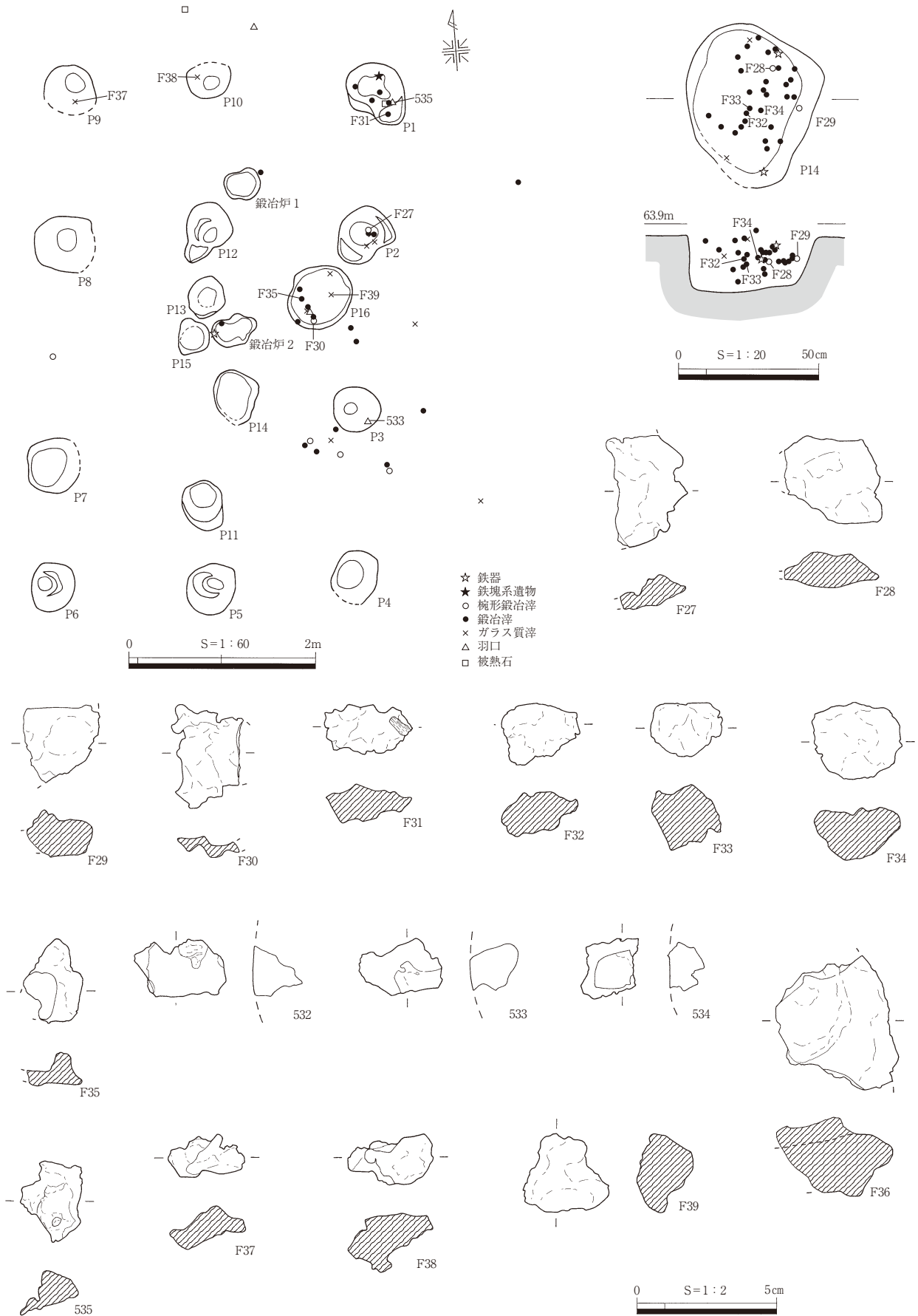


第162図 SB3周辺鍛冶関連微細遺物分布図

奈良時代

この時代を特徴付けるものは鍛冶関連遺構の存在である。4区南西部を中心に検出され、掘立柱建物跡3棟、竪穴建物跡1棟、鍛冶炉4基、廃棄土坑を含む土坑5基から構成される(第160・161図)。

このうちSB3は鍛冶炉2基を伴い、椀形鍛冶滓なども多く出土したうえ、周辺の土壌中から微細遺物も回収できている。第163図にSB3周辺の椀形鍛冶滓



第163図 SB3および出土遺物

表11 SB3微細遺物一覧表

出土位置	粒状滓(g)		鉄・鍛造剥片(g)				微細遺物合計(g)	出土位置	粒状滓(g)		鉄・鍛造剥片(g)				微細遺物合計(g)
	~2.0mm	合計	~0.8mm	0.8~2.0mm	2.0mm~	合計			~2.0mm	合計	~0.8mm	0.8~2.0mm	2.0mm~	合計	
a0		0.0	1.5	0.3	0.4	2.2	2.2	h4		0.0	0.7	0.2	0.2	1.1	1.1
a1		0.0	0.6	0.1	0.1	0.8	0.8	h5		0.0	1.7	2.7	1.8	6.2	6.2
a2		0.0	0.5	0.1	0.1	0.7	0.7	h6	0.1	0.1	3.2	4.8	3.6	11.6	11.7
a3		0.0	1.1	0.1		1.2	1.2	h7		0.0	2.1	1.3	0.1	3.5	3.5
a4		0.0	0.6	0.1		0.7	0.7	h8		0.0	3.4	0.7	1.3	5.4	5.4
a5		0.0	2.6	0.2	0.1	2.9	2.9	h9		0.0	1.1	1.0	2.0	4.1	4.1
a6		0.0	1.1	0.1	0.1	1.3	1.3	h10	0.1	0.1	1.9	0.4	0.7	3.0	3.1
a7		0.0	1.6	0.2	0.2	2.0	2.0	h11		0.0	0.9	0.2	0.2	1.3	1.3
a8		0.0	2.0	0.2	0.1	2.3	2.3	h12		0.0	0.8	0.2	0.2	1.2	1.2
a9		0.0	0.8	0.2	0.6	1.6	1.6	h13		0.0	0.5	0.2	0.1	0.8	0.8
a10		0.0	0.7	0.1		0.8	0.8	i6	0.1	0.1	3.5	0.8	0.2	4.5	4.6
a11		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4	i7		0.0	2.4	0.4		2.8	2.8
a12		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3	i8		0.0	1.4	0.2	0.2	1.8	1.8
a13		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3	i9		0.0	0.4	0.2		0.6	0.6
b0		0.0	1.4	0.2		1.6	1.6	i10	0.1	0.1	0.7	0.3	2.3	3.3	3.4
b1		0.0	1.6	0.2		1.8	1.8	i11	0.1	0.1	0.8	0.3	5.2	6.3	6.4
b2		0.0	0.9	0.1		1.0	1.0	i12		0.0	2.4	0.4	0.4	3.2	3.2
b3		0.0	1.1	0.2		1.3	1.3	i13		0.0	1.8	0.2	0.2	2.2	2.2
b4		0.0	1.9	0.2		2.1	2.1	j6		0.0	2.0	1.0	1.2	4.2	4.2
b5		0.0	2.0	0.2		2.2	2.2	j7		0.0	1.6	0.3	0.1	2.0	2.0
b6		0.0	1.2	0.2	0.1	1.5	1.5	j8		0.0	1.4	0.2	0.2	1.8	1.8
b7		0.0	3.1	0.6	1.4	5.1	5.1	j9		0.0	2.4	0.2	0.2	2.8	2.8
b8		0.0	2.2	0.2	0.1	2.5	2.5	j10		0.0	1.1	0.9	5.4	7.4	7.4
b9		0.0				0.0	0.0	j11	0.1	0.1	1.7	1.8	1.4	4.9	5.0
b10		0.0	0.7	0.1		0.8	0.8	j12		0.0	1.8	0.2	0.2	2.2	2.2
b11		0.0	0.4	0.1	0.2	0.7	0.7	j13		0.0	1.3	0.2	0.2	1.7	1.7
b12		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4	k-2		0.0	0.7	0.2	0.3	1.2	1.2
b13		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3	k-1		0.0	1.7	0.2	0.1	2.0	2.0
c0		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4	k0		0.0	1.8	0.2	0.2	2.2	2.2
c1		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4	k1		0.0	2.2	0.2	0.1	2.5	2.5
c2		0.0	1.9	0.2	0.1	2.2	2.2	k4	0.1	0.1	3.3	3.0	1.2	7.5	7.6
c3		0.0	1.0	0.2		1.2	1.2	k5		0.0	4.8	2.7	0.5	8.0	8.0
c4		0.0	0.7	0.1		0.8	0.8	k6	0.1	0.1	4.6	0.4	0.2	5.2	5.3
c5		0.0	1.1	0.1	0.1	1.3	1.3	k7		0.0	2.8	0.2	0.1	3.1	3.1
c6		0.0	1.1	0.5	0.8	2.4	2.4	k8		0.0	1.3	0.2	0.1	1.6	1.6
c7		0.0	3.9	0.7	1.1	5.7	5.7	k9		0.0	0.6	0.3	0.1	1.0	1.0
c8		0.0	2.0	0.2	0.2	2.4	2.4	k10		0.0	0.3	0.2	0.1	0.6	0.6
c9		0.0	1.2	0.2	0.2	1.6	1.6	k11	0.1	0.1	1.7		0.4	2.1	2.2
c10		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4	k12		0.0	0.8	0.2	0.1	1.1	1.1
c11		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3	k13		0.0	0.7	0.1	0.1	0.9	0.9
c12		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4	l-2		0.0				0.0	0.0
c13		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3	l-1		0.0	0.1	0.1	0.1	0.3	0.3
d2		0.0	0.2	0.2	0.1	0.5	0.5	l0		0.0	1.4	0.2	0.1	1.7	1.7
d3		0.0	0.5	0.2	0.1	0.8	0.8	l1		0.0	1.5	0.2	0.2	1.9	1.9
d4		0.0	0.4	0.1	0.1	0.6	0.6	l4	0.1	0.1	1.0	0.2	0.2	1.4	1.5
d5		0.0	0.6	0.2		0.8	0.8	l5		0.0	4.3	0.4	0.2	4.9	4.9
d6		0.0	0.9	0.4	0.2	1.5	1.5	l6		0.0	0.9	0.1	0.2	1.2	1.2
d7		0.0	1.4	0.4	0.5	2.3	2.3	l7	0.1	0.1	3.5	0.3	0.3	4.1	4.2
d8	0.1	0.1	2.7	0.2	0.9	3.8	3.9	l8		0.0	1.4	0.2	0.1	1.7	1.7
d9		0.0	0.7	0.2	0.1	1.0	1.0	l9		0.0				0.0	0.0
d10		0.0	0.3	0.1	0.1	0.5	0.5	l10		0.0				0.0	0.0
d11		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3	l11		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4
d12		0.0	0.5	0.1	0.2	0.8	0.8	l12		0.0	0.9	0.2	0.2	1.3	1.3
d13		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3	l13		0.0	0.5	0.1	0.1	0.7	0.7
e2		0.0	1.2	0.1	0.1	1.4	1.4	m-2		0.0	0.7	0.2	0.1	1.0	1.0
e3		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3	m-1		0.0	0.1	0.1	0.2	0.4	0.4
e4		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3	m0		0.0	0.2	0.2	0.1	0.5	0.5
e5		0.0	0.7	0.2	1.3	2.2	2.2	m1		0.0	0.8	0.1		0.9	0.9
e6		0.0	0.5	0.2	0.2	0.9	0.9	m4		0.0	1.0	0.2		1.2	1.2
e7		0.0	1.9	0.3	0.2	2.4	2.4	m5		0.0	3.2	0.3	0.1	3.6	3.6
e8		0.0	2.0	0.2	0.4	2.6	2.6	m6		0.0	2.2	0.2	0.2	2.6	2.6
e9	0.1	0.1	1.9	0.3	5.1	7.3	7.4	m7		0.0	2.2	0.3	0.2	2.7	2.7
e10		0.0	0.5	0.2	0.2	0.9	0.9	m8	0.1	0.1	1.8	0.3	1.0	3.1	3.2
e11		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4	m12		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4
e12		0.0	0.9	0.2	0.1	1.2	1.2	n-2		0.0	1.2	0.1		1.3	1.3
e13		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3	n-1		0.0	1.4	0.2	0.2	1.8	1.8
f4		0.0				0.0	0.0	n0		0.0	1.2	0.2		1.4	1.4
f5		0.0				0.0	0.0	n5		0.0	1.7	0.2	0.1	2.0	2.0
f6		0.0	0.5	0.2	0.2	0.9	0.9	n6		0.0	1.5	0.2		1.7	1.7
f7		0.0	0.4	0.1	0.1	0.6	0.6	n7		0.0	2.4	0.2	0.1	2.7	2.7
f8		0.0	2.3	0.3	0.1	2.7	2.7	n8	0.1	0.1	1.0	0.5	0.3	1.8	1.9
f9		0.0	1.0	0.3	0.2	1.5	1.5	o-2		0.0	1.6	0.1		1.7	1.7
f10		0.0	1.7	0.3	0.1	2.1	2.1	o-1		0.0	1.7	0.1	0.1	1.9	1.9
f11		0.0	0.8	0.2	0.4	1.4	1.4	o0		0.0	1.3	0.1		1.4	1.4
f12		0.0	1.8	0.3	0.2	2.3	2.3	o6		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4
f13		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3	o7		0.0	1.7	0.1		1.8	1.8
g4		0.0	0.6	0.2	0.1	0.9	0.9	o8		0.0	1.0	0.1		1.1	1.1
g5	0.1	0.1	1.8	1.8	0.6	4.2	4.3	鍛冶炉1	0.1	0.1	4.8	1.1	0.6	6.5	6.6
g6		0.0				0.0	0.0	鍛冶炉2	0.1	0.1	6.1	1.0	2.1	9.2	9.3
g7		0.0				0.0	0.0	P12	0.1	0.1	51.5	2.9	0.7	55.1	55.2
g8	0.1	0.1	2.0	0.4	0.1	2.5	2.6	P13	0.1	0.1	37.7	3.5	1.0	42.2	42.3
g9		0.0	1.7	0.5	0.3	2.5	2.5	P14	0.7	0.7	72.7	92.5	78.9	244.1	244.8
g10		0.0	0.9	0.2	0.3	1.4	1.4	P15		0.0	3.3	0.2	0.1	3.6	3.6
g11		0.0	1.0	0.2	0.2	1.4	1.4	P16	0.2	0.2	59.5	51.0	51.0	161.5	161.7
g12		0.0	1.5	0.3	0.2	2.0	2.0	P6	0.1	0.1	17.1	13.1	31.1	61.3	61.4
g13		0.0				0.0	0.0	P9	0.1	0.1	9.5	6.7	4.2	20.4	20.5
								計		3.2				1019.0	1022.2

等の出土位置と関連遺物の実測図を掲げた。関連遺物には椀形鍛冶滓F 27～30、鍛冶滓F 31～35、羽口532～534、羽口溶解物535、鉄塊系遺物F 36、ガラス質滓F 37～39などが認められた。図化していないものには被熱により破碎した礫片も数点あるが、鉄床石と判断できるものはなかった。これらはSB 3周辺全体に認められ、特に鍛冶炉2に近接するP 14・16から多量に出土している。またSB 3周辺における微細遺物の分布状況は第162図、表11に示すとおりである。サンプリング範囲の問題もあるが、鍛冶炉とその東側に微細遺物の分布濃度が濃いことを示している。とくにP 14・16からは鍛造剥片と粒状滓を合わせて、それぞれ244.8 g、161.7 gが出土している。鍛冶滓なども多く出土しており、廃棄場所であった可能性が高い。

SI30は床面などの被熱状況から居住のためのものではなく、鍛冶関連遺構と判断したものである。時期は異なるが、琴浦町の笠見第3遺跡では古墳時代中期末における竪穴を伴う工房と、竪穴を伴わず簡易な上屋を設けた工房の二者が想定されており(高尾・大川2007)、梅田萱峯遺跡も同様なあり方をしたものと見られる。

鍛冶関連遺物については詳細な分類検討に至っておらず、科学的な成分分析も行っていない。このため操業規模や内容については明らかではないが、鍛冶関連遺物が最も多く出土したSB 3周辺でも検出された鍛冶関連の微細遺物の総重量は1,022.2 gで、大量というほどではないため、大規模な操業は想定しにくい。集落内で使用する鉄器の製作等が行われたものであろう。

また本遺跡では製炭土坑と思われる遺構が10基検出されている。いずれも所属時期を決定できる遺物を伴っていないが、そのうち3基について出土した炭化物の放射性炭素年代測定を行った結果、SK142について7世紀から8世紀の年代が得られている。これをもって奈良時代の鍛冶関連遺構との関係を論じるわけにはいかないが、鍛冶工房への燃料材の供給については課題として残った。

さらに鍛冶工房と居住域との関係も不明な点が多い。今のところ奈良時代の竪穴住居跡は2棟検出されているが、うちSI33は鍛冶関連遺構SI30に切られているため、時期差を認めなければならない。梅田萱峯遺跡の発掘調査は丘陵のほぼ全域に及んでいるので、鍛冶工房に伴う居住域は未調査である丘陵南側か、それ以外の空間に求められる。奈良時代の鍛冶工房域と居住域との関係は、今後の周辺部の調査を待ちたい。

(湯村)

註

- (1) 本遺跡で検出された落とし穴から遺物が出土することはごく稀である。そのようななかでSK20は埋土中層から詳細な時期は不明ながら縄文土器の体部片と石斧が出土している。石斧は弥生時代に特徴的な伐採石斧の特徴を示さない。落とし穴が縄文時代のものである傍証になりえよう。
- (2) 素材剥片と呼んでいるものは、調整加工により石鏃となりうる長さ、幅、厚さを有すると判断したもので、一律に数値を限定したものではない。
- (3) 3区で検出された掘立柱建物跡は4棟あるが、遺物を伴っていないため時期の決定ができていない。3区の遺構・遺物が弥生時代中期後葉(Ⅳ-2～3)に限られること、掘立柱建物跡と他の遺構との間に切り合い関係が認められないことから、3区の他の遺構と同じ時期だと判断している。
- (4) 方形土坑の分類は昨年度調査の報告で示した。

参考文献

- 富長源十郎・江原俊雄1987『八重第3遺跡発掘調査報告書』中山町教育委員会
高尾浩司・大川泰広2007『笠見第3遺跡Ⅱ』鳥取県埋蔵文化財センター

第2節 梅田萱峯墳丘墓の検討

梅田萱峯墳丘墓の墳丘及び埋葬施設は、遺存状況が比較的良好である。今回は、その全面調査の実施により特異な構造が明らかとなり、弥生時代中期の墳丘墓の構造を解明する上で、貴重な調査事例となったといえよう。また調査成果から提起される問題点はさまざまである。本稿ではこれらを深く考察する時間的余裕はないが、墳丘各所で得た新しい知見から派生する問題点について整理を行い、今後の課題を明らかとしておきたい。

(1) 遺構の検討

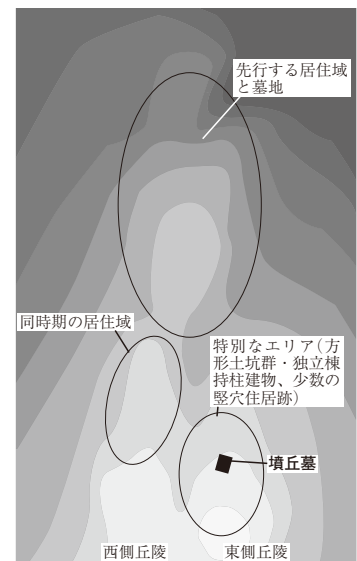
所在と立地 梅田萱峯墳丘墓が所在する東伯郡琴浦町から西伯郡大山町一帯は、大山北麓に位置し、墳丘墓と同時代の弥生時代中期後葉の遺跡が多く分布する^(註1)。主要なものだけでも、妻木晩田遺跡(米子市・大山町)、茶畑山道遺跡、茶畑六反田遺跡、押平尾無遺跡、名和飛田遺跡、百塚第7遺跡、退休寺遺跡(大山町)、笠見第3遺跡、久蔵峰北遺跡(琴浦町)などが挙げられる。このうち多くの遺跡が中期後葉に現れ、後期へと継続する。梅田萱峯遺跡もそうした集落遺跡の消長と同一歩調をとる遺跡の一つである^(註2)。

また大山北麓のこの地域における墓制の展開を概観すると、墳丘墓は、湯坂1号墓、井岡地中ソネ土壙墓群(琴浦町)、門前1号墓、荘田2号墓、徳楽墳丘墓、仙谷墳墓群、松尾頭墳墓群(大山町)、洞ノ原墳墓群(大山町、米子市)があるが、後期のものが大半であり、確実に中期に遡るものは皆無である^(註3)。

また、湯坂1号墓や門前1号墓など単独立地のものもあるが、一定範囲に墳丘墓の築造が継続し、丘陵上に墓域を形成する例も多い。また後期前葉から中葉にかけて四隅突出型墳丘墓が盛行するが、後期後葉になると方形墓が主流となることが既に指摘されている(松井1996)。また木棺・土壙墓群としては、退休寺遺跡で16基の木棺墓群が検出されており、遺物を伴わないが中期後葉と推定されている。また押平弘法堂遺跡でも中期後葉とみられる木棺・土壙墓群が検出されている。

こうした中、梅田萱峯墳丘墓は、墳丘墓としては唯一確実に中期に遡るものとして注目される。また上掲の周辺の遺跡のなかで、集落と墳丘墓との関係性が窺える遺跡は、わずかに妻木晩田遺跡と梅田萱峯遺跡のみである。今後、大山北麓地域の首長層が顕在化していく過程を解明する上で、集落と墓制の両面からのアプローチが可能な希少な事例といえよう。

さて、次にその立地についてであるが、遺跡が立地する二つの尾根筋のうち墳丘墓は東側丘陵上の西側縁辺部に位置し、西の谷への下降が始まる緩斜面に立地する。浅い谷を隔てた西側丘陵一帯は、これまで3次にわたる調査で弥生時代中期後葉を中心とした竪穴住居跡が多数見つかっている。このうち遺跡の北半部(1・2区)には墳丘墓より時期的に先行する弥生時代IV様式前半段階^(註4)の住居跡が多く分布する。墳丘墓と併行するIV様式後半段階の住居跡は、墳丘墓と同じ遺跡南半部(4区)に所在する。またこの時期、墳丘墓北側の3区にも比較的規模の大きい竪穴住居跡であるSI26があり、また墳丘墓の20m北には独立棟持柱建物が所在する。東側丘陵にはこのほか、墳丘墓の南側に方形土坑群があり、また出土遺物のなかには分銅形土製品が多く出土するなど、墳丘墓の存在や住居跡の僅少さも合わせて勘案すると、遺跡南半部東側丘陵の特異



第164図 墳丘墓の立地概念図

性は明らかである^(註5)。

このように墳丘墓築造当初は、浅い谷を挟み墳丘墓と竪穴住居群が向きあうといった景観が復元可能である。また、墳丘墓が立地する東側丘陵は、少数の竪穴住居や方形土坑群、及び独立棟持柱建物等で構成される特別なエリアを形成したと考えられる。

墳丘 11.3×8.6mの長方形の墳丘墓で、四辺に貼石をめぐらし、区画溝を伴う。現状の墳丘高は、西側区画溝底から63cmであるが、流失した土量は少なく、築造当初から低墳丘であったとみられる。

四隅の突出は認められず、また隅の稜線を意識した石の配置も認められないことから、中国地方山間部及び沿岸部から丹後まで日本海沿岸地域に広く分布する方形貼石墓の一つと考えられる^(註6)。

これまで丹後の方形貼石墓は、周溝を伴うことから、これを方形周溝墓と方形台状墓の複合とみて、山陰の方形貼石墓とは区別して考える見解もある(和田2003)。しかし梅田萱峯墳丘墓は、山陰にありながら区画溝を伴い、しかも貼石の手法に丹後との共通性が見出せることから、その位置づけを行う上で、両者を区分する分類の枠組みは適切ではない。むしろ方形を基調とする墳丘に貼石を伴う点こそ方形貼石墓の本質的な特徴と捉え、山陰から丹後までの日本海沿岸地域を中心に広く共有された墓制である点を重視すべきである。

今のところ方形貼石墓の直接的な系譜は不明であるが、既に指摘のあるとおり石を使用した墓制については、前期に類例を求めることが可能である(島根県立古代出雲歴史博物館2007)。

梅田萱峯遺跡において、他に石を使用した墓は、1区のⅣ様式前半段階の木棺墓群の中などに見出すことができる。注目されるのはSX15とされる配石墓で、1.1×0.9mの範囲に石を敷き詰めたもので、埋葬終了後、墓上に石による区画を示したものである。墓壙上に石を用いて墓域表示を行う点では、当墳丘墓と一致する。しかし墳丘墓とは規模や構造的に隔たりが大きく、当墳丘墓の直接的な祖形となるものではない^(註7)。このように方形貼石墓は在地の墓制の延長上に現れるものとは考え難く、やはりそこには大きなヒアタスが存在する。今後検証が必要であるが、今のところ方形貼石墓の広域にわたる分布の背景には、主に山陰から丹後にいたる日本海沿岸部の首長層の連携があるものとみている。その具体像の解明は墓制のみではなく、中期後葉における地域間交流の実態を踏まえ捉えなおす必要がある。

盛土 梅田萱峯墳丘墓は、盛土による墳丘築成の開始に先立って埋葬を終えている点が、一つの特徴である。こうした事例はいくつか散見される。同じ大山北麓地域の妻木晩田遺跡洞ノ原5・17号墓では、墓壙は基盤層から掘り込まれているようである。また同じ山陰地方の島根県江津市の波来浜遺跡A区2号墓は、斜面地に盛砂により構築された水平面に埋葬を行い、その後さらに盛砂により、墳丘の高まりを設け、貼石を施す。また後期の例であるが、B区1号墓も同様、9基の埋葬を終えた後、墳丘の構築が行われたと考えられている。こうした波来浜遺跡の事例から、墳丘の高まりが形成され、貼石が施されるのは、埋葬を終えた後であり、こうした葬法を中期から後期まで墨守していたことが窺える。梅田萱峯墳丘墓の場合、前代の配石墓も当墳丘墓と同様、墓造りの初期段階で埋葬を終え、その後墓上に墳丘あるいは配石を設置するといった造墓の手順が一致する。方形貼石墓という新たな墓制を受容するにあたり、在来の古い埋葬手順に組み込むかたちで導入したのと考えられる。

ところで弥生時代の墳丘墓の再分類を試みた和田氏は、墳丘と墓壙の構築順の違いを重要視して、

墳丘の構築に先立ち、埋葬を終えるタイプを墳丘後行型として墳丘墓の一類型として位置づけた(和田2003)。また朝鮮半島の三国時代の墳墓の地域性の析出を試みた吉井氏によると、それに先立つ原三国時代の墳墓においても、墳丘後行型とする埋葬の後に墳丘築成を行うタイプの墳墓と、墳丘築成が埋葬に先行する墳丘先行型が、互いに排他的に地域性を形成し、その地域性は三国時代まで継承されるとする(吉井2002)。このように埋葬と墳丘築成の構築順の違いは、地域差に起因する可能性が指摘されているが、梅田萱峯墳丘墓も同様に大山北麓一帯の地域的特性として敷衍できるのか、今後周辺の同時代の墳墓の調査を行う上で一つの課題といえる。

区画溝 墳丘墓の南と西側で溝が検出された。地形的に高所側に位置する南側区画溝は、文字通り丘陵と墳丘を区画するためのものとみられる。いまひとつの溝は、地形的に区画を行うのに適当な北側ではなく、斜面である西側に位置する。また墳丘墓西側は、張出部を設けたり、総数およそ250点の貼石のうち、半数を超えるおよそ130点の石が西側貼石に使用されている。また、墳丘墓は東側丘陵の西寄りに立地する。こうした墳丘墓の諸々の特長と、谷を隔てた西側丘陵に同時期の居住域が広がることを勘案すると、墳丘墓は西側を正面観として意識して構築されたと考えられる。

貼石 貼石の遺存状況は比較的良好である。貼石の据え方は、北と南で顕著な差異が認められた。南側貼石の大部分は石の平滑な面を外に向け、長軸を縦にして、斜め40～60度ほど傾けて据えられていた。第4章2節でa手法と呼称したものであり、同時期の丹後半島周辺の方形貼石墓にみられる石の貼り方と共通する(註8)。また島根県江津市波来浜遺跡A-2号墓やB-1号墓(註9)など山陰地方における初現期の方形貼石墓にもみられ、広島県三次市宗祐池西2号墓にみられるように初期の四隅突出型墳丘墓にも受け継がれている。このことからa手法は、方形貼石墓という墓制とともに、おそらくはこれに付随する要素として中期の日本海沿岸地域に広まり、さらに三次盆地と山陰地方においては、後期の四隅突出型墳丘墓にまで、受け継がれたものと考えられる。またb手法とした石の平滑面を垂直に立てる据え方は、四隅突出型墳丘墓の立石に類似する。用材が大きいため見かけはやや懸隔するものの、石を据え付ける手法としては同様であり、意識的に配置を行ったのが、四隅突出型墳丘墓の立石といえよう。

梅田萱峯墳丘墓の北側貼石の多くは南側貼石とは対照的に、石の小口を外に向け、3段ほど積み重ねるといった古墳の葺石と見紛うような積み方で、これは先にc手法としたものである。各地の墳丘墓の中には少数ながら貼石が石垣状を呈するという報告例が散見される。広島県三次市花園遺跡1号台状墓の貼石の一部や、岡山県津山市三毛ヶ池1号墓、総社市伊与部山墳丘墓、岡山市都月坂2号墓などが挙げられるが、詳細な手法の比較は困難であり、今のところc手法は墳丘墓の中に系譜を追うことは難しい。またd手法とした石の長側面を外側に向けた長手積みもところどころで見受けられた

表12 弥生時代中期の方形貼石墓 (加藤2005をもとに作成)

遺跡名	所在地	規模
専光寺脇1号墓	島根県益田市	9.6×8.8
専光寺脇2号墓	島根県益田市	不明
波来浜A区2号墓	島根県江津市	4.0×5.0
中野美保2号墓	島根県出雲市	5.5×4.5
三成2号墓	島根県松江市	5×5(推定)
友田遺跡B区1号墳丘墓	島根県松江市	12.5×9.8
友田遺跡B区2号墳丘墓	同上	12×5.7～5.9
花園遺跡1号墓	広島県三次市	31.3×19.8
四拾貫小原遺跡	広島県三次市	8×5(推定)
梅田萱峯墳丘墓	鳥取県琴浦町	11.3×8.6
粟鹿遺跡E地区SX01	兵庫県朝来市	13.2×9.3以上
奈良岡遺跡方形区画1	京都府京丹後市	26.8以上×6.1以上
奈良岡遺跡方形区画2	同上	5.4以上×1.6以上
小池12号墓	京都府京丹後市	不明
小池13号墓	京都府京丹後市	6.5×3.7
難波野SX22号墓	京都府宮津市	16.2×7.8以上
難波野SX29号墓	同上	6以上×1.5以上
千原遺跡	京都府与謝野町	不明
寺岡遺跡SX56号墓	京都府与謝野町	31×17
日吉ヶ丘遺跡SZ01	京都府与謝野町	32×20
日吉ヶ丘遺跡SZ02	同上	21以上×18.5
志高遺跡1号墓	京都府舞鶴市	7.2×9.0
志高遺跡2号墓	同上	15m×?
志高遺跡3号墓	同上	(6.5)×(8.7)m

が、c手法と同様系譜は不明である。

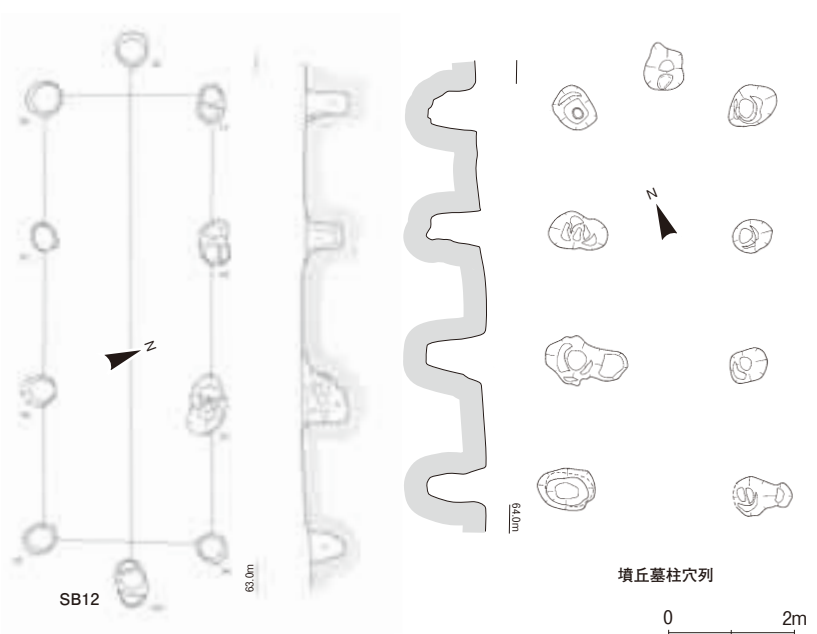
石材 梅田萱峯墳丘墓の貼石には総数およそ250点の石が使用されているが、墳丘墓が立地する丘陵は、大山から噴出された火山灰台地であり、石は基本的に丘陵の下部に含まれるのみである。よって丘陵上の貼石の石材はすべて人為的に持ち込まれたものである。石材鑑定の結果、板状安山岩の亜角礫が主体であり、船上山塊に源流を持つ近在の河川から運ばれた可能性が高いとされる。遺跡の東側には黒川、西には甲川が北流する。ともに船上山塊に源流をもつ中・小河川である。遺跡から直線距離にして約1.2km東にあたる黒川流域の大字湯坂周辺の河原では、貼石に使用されたような亜角礫は少なく、亜円礫や、円礫が多く見受けられる。また遺跡から直線距離にして約1km西の甲川流域の大字石井垣付近の河原も同様に亜円礫や円礫が多い。このことから、貼石に多く用いられた亜角礫の採取地は、いずれの川であれ直近の河原よりさらに上流に遡った地点と考えられる。

また貼石の中には少数であるが、海岸部から持ち込まれたとみられる石もみられた。遺跡から直近の海岸部である筥津まで、直線距離にして北へ約1kmである。このことから石材の採取地は遺跡から少なくとも半径1km以遠の河川や海であったと考えられる。

柱穴 梅田萱峯墳丘墓を特徴付ける要素の一つとして、9本の柱穴列が挙げられる。層位的にみて、埋葬が終了した後、盛土の途中に掘り込まれたことは確実である。柱の並びは整然としているが、上屋構造の有無を知る手がかりは得られなかった。ここでは柱穴列について一般集落の掘立柱建物との比較及び墳墓出土の柱列との比較を行い、複眼的な検討を通して、その性格について検討を加えたい。

ところで梅田萱峯墳丘墓の北側、3区には独立棟持柱建物(SB12)がある。土器を伴わないが、周辺の遺構の時期等を勘案し中期後葉と位置づけられている。墳丘墓とほぼ直交する位置関係にあり、時期的にも共時的であることから、両者の関連性がうかがえ、興味深い。まずは、SB12(旧称SB1)との比較検討を通じ、柱穴列の性格について考えてみたい。

SB12は桁行3間、梁間1間の7.1×2.7mの規模である。墳丘墓の柱穴列は桁行、梁間は同様であるが、規模は6.3×2.76mとやや小さい。仔細に見ると梁間は両者ほぼ同じであるが、SB12はP2-P3間とP6-P7間の側柱の柱間がやや長くなるため、桁行総長がやや長くなる。これに対し墳丘墓の場合、側柱の柱間は2.1mとほぼ等間であることから、建物とみた場合、両者は構造的に若干異なる可能性がある。また個々の柱穴の規模を比較すると、SB12は大きさ、深さともに平均的な東南隅の柱穴で直径約50cm、深さ60cmと一般の集落遺跡で検出される柱穴の



第165図 墳丘墓柱列とSB12の比較

規模とかわりはないといえよう^(註10)。

一方墳丘墓の柱穴は、一回り大きく、直径約60～70cm、掘り込み面からの深さは1mを超える。柱穴の直径は一回り大きいものの、SB12と同様一般集落で検出される範疇の規模である。しかし深さは1mを越え、一般集落で検出される掘立柱建物の柱穴としてはやや異質な感がぬぐえない。このように両者は立地や時期的な近接性から、何らかの関連性が窺えるものの、規模や構造に若干の相違があるといえよう。SB12は一般集落において標準的な規模であるのに対して、墳丘墓柱穴列の特異性が臙げながら浮き彫りとなるであろう。

そこで、次に墳墓に伴う柱穴との比較を行うこととする。

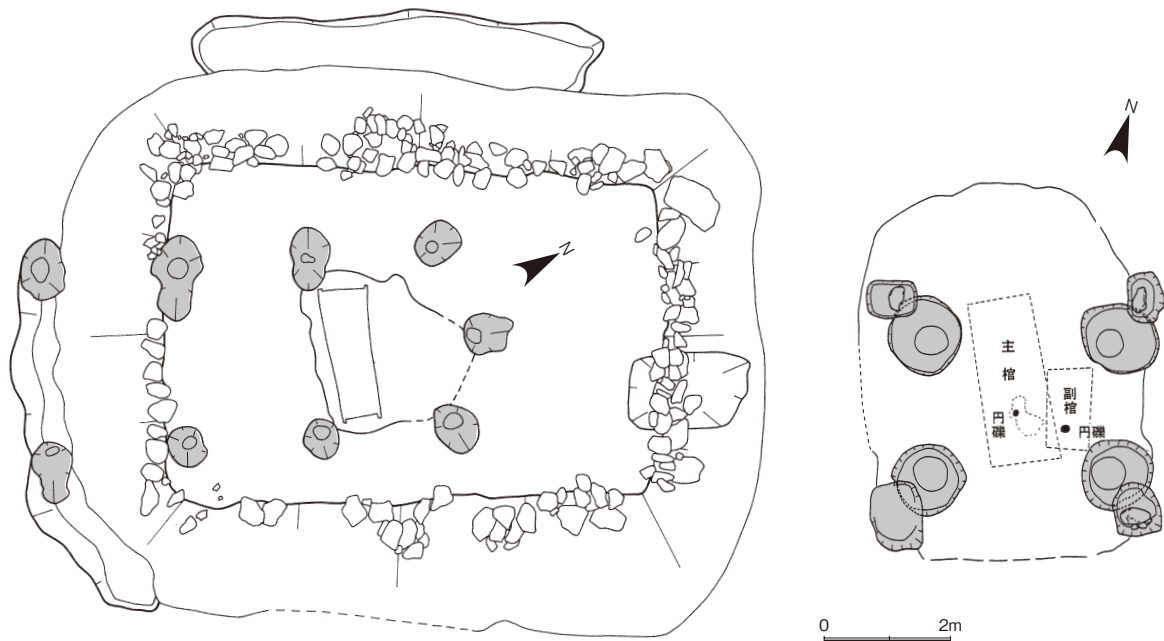
弥生時代の墳墓において、柱穴を伴う事例は少なくない。しかしその形態は多様であり、墓壙を囲み建物となる可能性を持つもの、柵状のもの、複数又は単独のもの、単独であるが大柱を引き込むためのスロープを持つものなどが挙げられる^(註11)。

こうした多様なあり方は、性格が異なるものが混在する可能性があることから、同列に取り扱うべきではなかろう。ここでは、埋葬施設の上を柱穴が取り囲む例を集成し、表13に掲げた。こうした事例を古代中国の陵寝制と関連付ける指摘もあるが、中国では恒常的な建物として建てられるのに対し、国内では柱が抜き取られる例もあり、現状ではその検証は難しい。

表13によると後期に下る事例が大半を占める中、梅田萱峯墳丘墓は唯一中期に遡上する例であり、今のところ最古の事例といえる。また表に掲げた中には柱穴と墓壙が同一面で検出され、層位的関係が不明なものもあることから、時期が異なる遺構の重複の可能性を残すものもある。そうした中、出雲の王墓と目される西谷3号墓の第4主体部は、4基の支柱穴が、墓壙埋土を切り込み、また柱痕跡の上部に供献土器が落ち込んだ状態で出土し、上部を盛土で覆われた状態で確認された(渡邊1993)。層位的にみて柱穴が墳丘に伴うことが明らかであることから、ここでは地理的にも梅田萱峯墳丘墓と

表13 柱穴を伴う墳墓(石野2001、渡邊2007をもとに作成)

遺跡名	所在地	時期	概要
梅田萱峯墳丘墓	鳥取県琴浦町	中期	埋葬施設上に9基の柱穴列
平原1号墓	福岡県前原市	後期	埋葬施設上に10基の柱穴列
空港跡地遺跡ST10	香川県高松市	後期	埋葬施設上に6基の柱穴列
西谷3号墓	鳥根県出雲市	後期	埋葬施設上に4基の柱穴列
十五所遺跡10号方形周溝墓	山梨県南アルプス市	後期	埋葬施設上に6基の柱穴列



第166図 梅田萱峯墳丘墓と西谷3号墓柱穴列の比較

比較的近い西谷3号墓第4主体部(ここでは西谷と略す)を組上に上げ、梅田萱峯墳丘墓(同様に梅田と略す)との比較検討を行うこととする。

まず両者の共通項としては、いずれも墳丘が完成する以前に柱穴の掘削がなされている点が挙げられる。西谷は「土壌内部の埋土中の面から掘り込まれて」おり、墓壙埋め戻しの最中に柱を立てている。梅田は、墓壙埋め戻しの後、盛土の途中に柱を立てているが、西谷と同様地山まで掘り込まれ、最終的には盛土に覆われる。

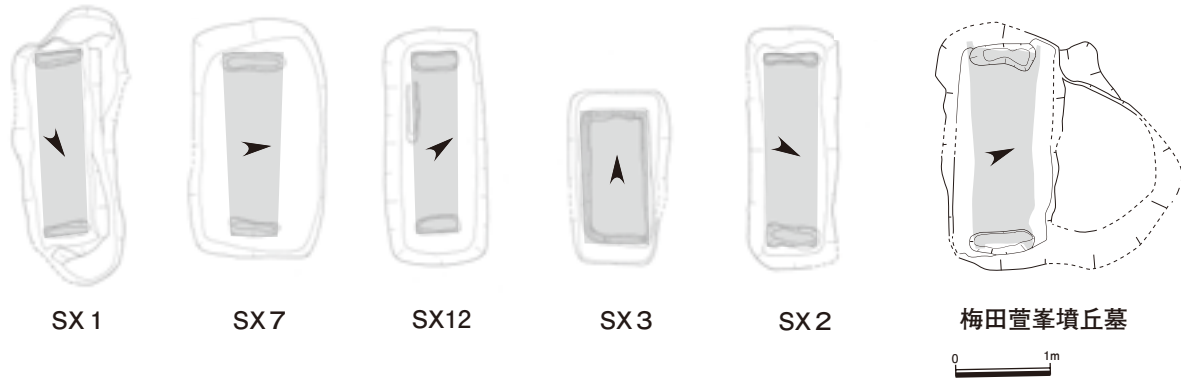
次に柱穴の深さであるが、西谷は「掘り込み面からの深さ60～90cm」であるのに対して、梅田は、掘り込み面からの深さが1mを越え、共に一般集落の掘立柱建物の柱穴に比べ、深いといえる。次に柱穴間の距離であるが、西谷は短辺側が2.1m、長辺側が2.8m、梅田は短辺2.76m、長辺は概ね2.1mの等間である。このように短辺と長辺という違いはあれ、両者の柱穴間距離は近似値を示す。また両者とも柱穴列の長軸は棺の主軸に対し直交する点も共通する。また西谷は、柱穴に囲まれた中央部の墓壙埋土から多量の土器が出土しており、墓上祭祀の場と考えられている。梅田においても墳頂部に供献されたとみられる赤色塗彩を施した土器が周辺から若干出土したことから、西谷と同様、柱列に囲まれた空間で墓上祭祀が執り行われたものと考えられる。このように西谷と梅田の墓上施設には、様々な面で共通点を見出すことが可能である。埋土の状況は、西谷の柱穴掘方の埋土は「互層状に土をつめて裏込めとしている」のに対し、「柱痕部の土は粘土ではなくサラサラした均質な土であり」、「柱が徐々に立ち腐れしたのではなく、柱根が急速に腐ってその部分が空洞化したか、あるいは柱を垂直方向に抜き取ったかしたことが想定される」といった状況であり、そのいずれかという点については、断定を避けている^(註12)。

一方、梅田の柱穴の埋土中への立ち上がりは、抜き取り痕跡である可能性が高い。また柱穴埋土はしまりがあるのに対し、抜き穴の埋土は同様の土質ながら、しまりが弱い。西谷も梅田と同様比較的早い時期に墓上施設が撤去された可能性もあり、共通項といえるかもしれない。このあたりの判断は、西谷の本報告を待ちたい。

次に両者の相違点であるが、西谷は建物と仮定すると梁行、桁行ともに1間であるのに対し、梅田は梁行1間、桁行3間であり、北側のみ独立棟持柱状の柱穴を伴う。また西谷は墳丘内に柱穴が収まるのに対し、梅田は墳丘外まで延びる点が挙げられる^(註13)。また西谷には副柱が伴うが、梅田にはない。

柱穴の規模は、梅田が長軸70cm前後であるが、西谷は長軸110～125cmと一回り大きい。共に柱材は遺存しないが、想定される柱の直径は梅田が直径20cmに対し、西谷は30～40cmと一回り大きい。西谷は吉備の特殊壺や特殊器台をはじめ他地域の土器が少なからず含まれている。また全面に朱が塗布された丸石が置かれ、周囲に玉砂利を敷き詰めるなど、荘厳な祭祀空間が創り出されている。一方梅田は、墳頂部とその周辺から多くの土器の細片の出土を見るものの、出土品の内容は西谷に遠く及ぶべくもない。

以上のように両者の比較を通じ顕著な相違点として挙げられるのは、柱穴列の規模と配置である。しかしこれらを別にすると、共に墳丘上に祭祀空間を創出する施設であることや、細部にわたる多くの共通点が顕著に認められる等、両者の関連性が窺える。また相違点とした墳頂部の著しい土器の出土量の違いや柱材の太さの違い等は、後出する西谷においては、より盛大かつ荘厳化したあり方を示すものと理解することができよう。規模の違いはあれど、墓上におけるあり方、設置の工程等からみて、両者は同一の系譜上にあるものと考えられる。時期的には梅田は中期後葉で西谷は後期後葉と、



第167図 梅田萱峯墳丘墓第1主体部と木棺墓との比較

現状では時間的に不連続であるが、今後空白期を埋める類例の新出を期待したい。

埋葬施設 埋葬施設は2基で、墳丘中心に位置する第1主体部は組合式木棺を納める。副葬品は皆無であったが、西側の小口幅が広いことから、被葬者は西頭位で埋葬されたものとみられる。第2主体部は土壙墓で、墓壙の上部から供献された土器が破片となって出土した。

2基の埋葬施設はいずれも地山面から墓壙が掘り込まれていることから、いずれが初葬であるのか、判断は困難であるが、第1主体部が墳丘中心に位置し、また木棺を伴う点からも造墓契機となったことは明白である。

木棺構造・墓壙規模の比較 ここでは造墓契機となった墳丘墓第1主体部の位置づけを明確にするために、若干時期的に遡るⅣ様式前半段階のものではあるが、梅田萱峯遺跡1区で検出した木棺墓との比較・検討を行うこととする。

1区では15基の木棺・土壙墓が検出された。このうち4基は小口穴を伴う組合式木棺で、木棺墓は他にもう1基ある。第167図はこの5基の木棺墓と墳丘墓第1主体部との大きさの比較を行ったものである。その結果、墳丘墓第1主体部の下段墓壙に限れば、墓壙及び木棺の規模は、他とほぼ同じであり木棺構造にも顕著な違いはないといえる。一般成員の埋葬との差異といえば、不整形な上段墓壙及び、墳丘を伴うといった点である。このように墳丘墓の被葬者は、集落の一般成員とほぼ同等の埋葬施設に納められており、後期の首長墓にしばしば見受けられる埋葬施設構造の複雑化や墓壙規模の大型化は認められず、隔絶化した首長の姿は窺えない。

(2) 墳丘墓構築の諸段階

ここで墳丘墓の構築順序を整理し、築造過程を復元的に追うこととする。

第1段階(埋葬) 地山を掘り込み、木棺を納め、墓壙を埋め戻す。この段階で2基の埋葬は終了する。整地はこの段階に行われ、その過程で旧表土が除去された。

第2段階(1次盛土・立柱) 盛土を開始する(1次盛土)。この時点で既に墓壙は見えなくなる。盛土の構築単位は明確ではなく、短期間に一気に作業を行ったものと推察する。盛土作業を半分以上終えたところで、柱穴を掘り込み柱を立てる。

第3段階(2次盛土) 引き続き盛土を施し(2次盛土)、墳丘が完成する。この時点で柱穴掘方は見え

ない。またこの段階で柱に囲まれた祭祀空間が整い、墓上祭祀が執り行われたと考えられる。土壇上の高まりの上に9本の柱が林立する光景が窺える。

第4段階(柱の抜き取り) 儀礼行為終了の後、祭祀空間を形成していた柱は抜き取られ、不要なものは片付けられたと推察する。東に隣接するSK116はこの段階に掘削された可能性がある。

第5段階(貼石) 近隣の海や川から石を集め、貼石を施す。石の安定化を図るため、掘方を設け土を充填しつつ石を据え付ける。区画溝の墳丘側の肩は盛土による墳丘裾と一致することから、区画溝は第3段階以降の掘削とみられるが、墓上祭祀が終了した後、周辺整備が図られる墳墓構築の最終段階に掘削された可能性が高いと推定する。

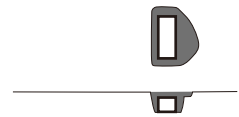
このように、今日我々が墳丘墓として目にする姿は、幾たびにも及ぶ築造の工程を経た後の最終的な姿に過ぎず、墳丘墓の完成に至るまでには、木棺墓→柱列が聳え立つ土壇上の高まり→方形貼石墓というようにその態様の変化を繰り返してきたことが明らかとなった。またそれが、埋葬から墳丘墓の完成に至る一連の葬送儀礼と密接な関係を有していたことは言うまでもない。

(3) 出土遺物の検討

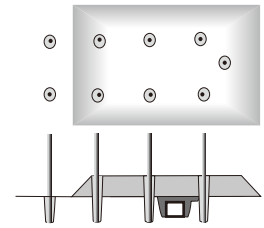
出土土器について 墳丘墓から出土した土器は、出土量は多いがほとんどが細片である。各所から出土するが、墳頂部や墳丘墓周辺から出土する土器が最も多い。器種としては甕が目立つが、赤色塗彩を施した土器や、絵画土器が他の場所よりも比較的多い。これらの土器は本来、墳頂部に供献された土器と推察する。また墳丘南半部の盛土内からも比較的多くの土器の細片の出土をみた。盛土内において若干の接合例はあるが、大半は細片である。こうした盛土内の土器の出土レベルは一定でなく、築造以前の土器の混入とみられるが、墳丘南半部に偏在する理由は定かでない。また貼石裏込土から出土の土器も、混入品とみられる。一部に墳丘墓周辺出土土器との接合例があることから、墓上祭祀で使用された墳頂部の土器の一部が、貼石設置時に混入したものであろう。第1主体部では、墓壙埋土から混入品とみられる若干の土器が出土したのみで、墓壙上面や墓壙掘り込み面である周辺の地山面からは、まとまった土器の出土がみられなかった。このように第1主体部では、埋葬直後の儀礼の痕跡は認められなかった。第2主体部は、墓壙上面に供献土器とみられる土器が比較的まとまって出土したが、全て破片であり、接合関係も認められなかった。

このように梅田萱峯墳丘墓では、比較的多くの土器が出土している。墳丘の構築には大別5段階に

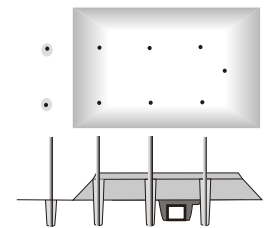
第1段階 埋葬



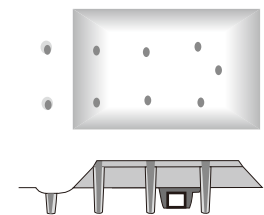
第2段階 1次盛土・立柱



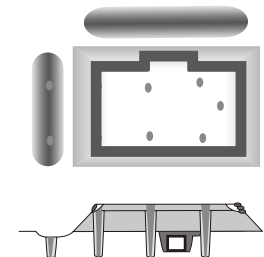
第3段階 2次盛土



第4段階 柱の抜き取り



第5段階 貼石



第168図 構築過程模式図

及ぶ築造の工程があり、その構築の諸段階に伴う土器様相も明らかとなったが、出土土器はいずれも顕著な時期差を示さず、同一時期幅におさまるものと考えられる。いずれも清水編年のⅣ-2～3様式の範疇であることから、墳丘墓は弥生時代中期後葉(Ⅳ-2～3)の築造と考えられる。

絵画土器について 墳丘墓出土遺物の中で、特徴的な遺物として、シカをモチーフとしたとみられる絵画土器が挙げられる。弥生時代墳墓に絵画土器が伴う例としては、山陰地方では、島根県出雲市美談神社2号墳下遺跡から出土した、中期後葉の壺棺とみられる壺にシカが4頭描かれた例がある(山田2006)。これはシカが創造と復活を司るといった観念により、神格化されたものとの解釈がなされている(橋本1994)。他地域では、北部九州において中期前葉の甕棺にシカを描く例がある。これも同様に「抜け替わる雌鹿の角に、稲の発芽から刈り入れまでのサイクル、さらには生命の再生や復活を重ねてイメージした」と解釈されている(常松2006)。このことから墳丘墓に伴う本例も同様に、再生の象徴としてのシカと、当時の死生観との結びつきを示すものかもしれない。

(4) 梅田萱峯墳丘墓の意義

梅田萱峯墳丘墓は、今のところ県内最古の墳丘墓である。また居住域と同一遺跡内にありながら一般構成員の墓地から切り離され、特異な性格を帯びるエリアに単独で立地するあり方は、特定個人の顕在化した姿を示すものといえよう。一方で木棺構造や大きさは、一般の木棺墓と大差なく、副葬品を伴わない点などは、初現期の墳丘墓の被葬者像を窺う上で興味深い。また、9基の柱穴列から成る墓上施設の存在は、墓上で祭儀が執り行われたことを窺わす。梅田萱峯墳丘墓のこうしたあり方は、後期後葉の西谷3号墓第4主体部の墓上祭祀の祖形と位置づけられ、後期社会に王墓祭祀として導入されるにあたり、規模も盛大なものとなり、祭りの場として荘厳化を図ったものと考えられる。

以上のように梅田萱峯墳丘墓の調査は、山陰地方における弥生時代の王墓祭祀の系譜の一端を明らかにしたほか、弥生時代に形成され、古墳時代に発展していく首長権の形成される過程を研究する上で重要な知見をもたらしたといえる。

(小山)

本稿執筆に当たり下記の方々には有益な御教示をいただいた。末筆ながら記して感謝いたします。

(順不同敬称略) 渡邊貞幸 肥後弘幸 石野博信 松本岩雄 三枝健二 大川泰広

註

- (1) ここでは旧町村名で東伯町、中山町、名和町、大山町、淀江町の範囲をさす。
- (2) 梅田萱峯遺跡は後期になると住居跡の数が減少し、一見遺跡の衰退期に向かう様相を示すが、遺跡から南西約500mの同一尾根上には後期の集落跡である八重第3遺跡が現れる。このことは中期から後期にかけて、居住域が同一尾根上を北から南へと移動したことを示すものとみられる。これは梅田萱峯遺跡においてⅣ様式前半から、後半にかけて居住域が北から南へと移る現象と一致する(湯村2008)。
- (3) 従来中期末に比定されていた洞ノ原1・2号墓は、出土した土器の再検討の結果、後期に下るという指摘がなされているが(濱田2001)、異論もあり(松井2006)意見の分かれるところである。私見では梅田萱峯墳丘墓出土土器との比較においては、中期的要素を払拭しつつある洞ノ原1・2号墓の土器よりも少なくとも古いと考えている。
- (4) ここでいうⅣ様式前半とは、壺や甕にまだⅢ様式の色合いが色濃く残る段階で、清水編年のⅣ-1様式(清水1992)、高尾編年のⅣ-1期(高尾2008)に相当する。またⅣ様式後半は、壺や甕の無文化、甕の内面の篋削り範囲の拡張が顕著となる段階で、おおむね清水編年のⅣ-2～3様式に相当し、高尾編年のⅣ-2期古段階及び新段階に相当する。

- (5) こうした特異性を墳墓祭祀と結びつける見解もあるが(湯村2008)、墳墓祭祀との関連性については、いまだ明らかとは言えず、本稿ではこうした見解には慎重な立場をとりたい。
- (6) これは重視する属性によりさまざまな名称で呼ばれており、また同じ「方形貼石墓」といった場合でも指し示す内容に差異がある。このあたりのことは、仁木氏により用語の整理が行われている(仁木2007)。本稿では、「周溝の有無に関わらず『方形の墳丘』に『貼石・緑石等の配石構造』が施されている点こそが、方形貼石墓を最も特徴付けている」とする仁木氏の定義に従う。
- (7) 方形貼石墓と前代の配石墓の関係を全否定するものではなく、前代の配石墓等の石を用いた墓づくりで醸成された基盤の上に、方形貼石墓が成立したと推察する。
- (8) 肥後弘幸氏に現地にて御教示いただいた。
- (9) 波来浜遺跡では墳丘裾まで貼石が施されており、丹後半島周辺でみられるような墳丘斜面上部のみ貼石を施すといったあり方は、山陰地方では梅田萱峯墳丘墓以外みられない。このことから梅田萱峯墳丘墓は、よりいっそう丹後の墓制との共通性が色濃く現れているといえよう。
- (10) 一般集落における掘立柱建物の規模との比較には以下の文献を参照した。(高倉1994、下村1994)
- (11) 弥生時代の墳墓に伴う柱穴を扱った論考としては以下のものが挙げられる。(原田1991、渡邊1993、石野2001、境2001、石崎2004、植田2005、植田2008)
- (12) この点について石野氏は抜取穴が認められないこと等から抜き取ったものではなく、立ち腐れの痕跡であり、墓上祭儀終了後も一定期間柱が立っていた可能性を示唆する。(石野2001)
- (13) 平原1号墓では墓壙を囲む独立棟持柱建物の延長上に大柱が検出されており、墓上施設と墳丘外の遺構との関連性が見出せる唯一の類例である(柳田2003)。

参考文献 紙数の関係上、大部分の報告書は割愛させていただいた。

- 原田大六1991『平原弥生古墳』平原弥生古墳調査報告書編集委員会
 渡邊貞幸1993「弥生墳丘墓における墓上祭儀－西谷三号墓の調査から－」『島根県考古学会誌』第10集
 高倉洋彰1994「弥生時代の大型掘立柱建物」『月刊考古学ジャーナル』No.379
 下村 智1994「玄界灘沿岸地域の大型建物」『月刊考古学ジャーナル』No.379
 橋本裕行1994「弥生絵画に内在する象徴性について」『原始の造形－縄文・弥生・古墳時代の美術』(日本美術全集1) 講談社
 松井 潔1996「山陰東部における後期弥生墓制の展開と画期」『考古学と遺跡の保護』 甘粕 健先生退官記念論集刊行会
 石野博信2001『邪馬台国の考古学』歴史文化ライブラリー 113 吉川弘文館
 境 靖紀2001「弥生時代大柱祭祀の一例－春日市立石遺跡の検討－」『古文化談叢』第47集 九州古文化研究会
 濱田竜彦2001「洞ノ原墳墓群に関する一考察－洞ノ原1号墓・洞ノ原2号墓出土土器の再検討を中心に－」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2001』
 吉井秀夫2002「朝鮮三国時代における墓制の地域性と被葬者集団」『考古学研究』第49巻第3号
 柳田康雄編2003『平原遺跡』前原市文化財調査報告書 第70集 前原市教育委員会
 和田晴吾2003「弥生墳丘墓の再検討」『古代日韓交流の考古学的研究－葬制の比較研究－』
 石崎善久2004「丹後地方弥生墳墓における祭祀行為について－墳墓祭祀からみた赤坂今井墳丘墓－」『京都府埋蔵文化財情報』第91号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
 植田文雄2005「立柱祭祀の史的研究－立柱遺構と神樹信仰の淵源をさぐる－」『日本考古学』第19号日本考古学協会
 加藤晴彦編2005『日吉ヶ丘遺跡』加悦町文化財調査報告第33集
 島根県立古代出雲歴史博物館2007『弥生王墓誕生』企画展図録
 松井 潔2006「弥生時代後期の地域社会」『調査研究紀要』1 鳥取県埋蔵文化財センター
 常松幹雄2006「鹿と鉤の廻廊」『原始絵画の研究』設楽博己編 六一書房
 山田康弘2006「山陰地方の弥生絵画」『原始絵画の研究』設楽博己編 六一書房
 仁木 聡2007「四隅突出型墳丘墓の『配石構造』の系譜と展開」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』
 渡邊貞幸2007「王墓出現とその背景」第7回「神在月古代文化シンポジウム王墓誕生」島根県古代文化センター・島根県立古代出雲歴史博物館
 湯村 功2008「方形土坑の性格と位置づけ」『梅田萱峯遺跡Ⅳ』鳥取県埋蔵文化財センター
 植田文雄2008「墳墓の立柱祭祀－弥生系立柱祭祀の展開について－」『王権と武器と信仰』同成社
 高尾浩司2008「山陰地方東部における弥生時代中期の土器編年－大江山麓地域を中心に－」『地域・文化の考古学』下條信行先生退任記念論文集